

柳川郷土研究会  
会誌「水郷」付録

すいきょう

# 瓦版

発行所 柳川郷土研究会

柳川市本城町 113-1

発行人 武松 豊

柳川城復元図



現在のお花方面より望んだ柳川城。正面が「乾櫓」。その右が五層五階八棟造りの天守閣が見える。正面「乾櫓」より左が「艮(うしとら)櫓」である。「乾櫓」と同じ造りで、両方とも多門櫓を付属し築地塀で接続している。立花三宗氏の描くこの画には、立花宗茂が朝鮮出兵のおり持ち帰ったといわれる「カササギ」(別名・コウゲガラス、カチガラス)が二羽、西の方へ飛んでいる。

## 土竜(もぐら)の囁き

昭和二十年、呉軍港を爆撃したアメリカ機は、帰路、被弾し柳井付近の山中に墜落した。生き残った乗員は撲殺を覚悟したが村人達は彼等を救出し、温かく傷の手当てを施した。

しかし、憲兵により広島へ護送された彼等は、皮肉にも自軍の投下した原爆を浴びてしまった。一人が死を目前に夢遊病者のようにふらふらと橋のたもとで倒れた。

そこに怒りの市民の投石をうけ、遂に彼は死亡した。これを見た一婦人が、哀れな彼を、「敵国人でも死ねば仏」と手厚く葬った。

その後その場所には墓石が建てられ、今も花と線香が絶えることがない。戦後、唯一の生存者であった元機長は家族と共にこの地を訪れ、日本人の優しさと、過ぎた不幸な時代の軍人達の死を悼み涙した。柳井では、その集落の人々が大歓迎した。呉軍港では多くの戦友が爆死したが、艦の生き残った旧軍人達は過去のしがらみを払いのけ温かく迎え握手した。涙、涙、涙であったという。

「信じられない日本人の優しさ。これらのことは同行した息子が全米に語り継ぎます」と、言い残して元機長は帰国した。

忘れまじ原爆の惨、失うまじ日本人の優しさ。

優しき者は常に勇者なり。

(土竜)